

2025年5月25日（日）復活節第6主日

銀座教会・新島教会 家庭礼拝

**礼拝招詞** 「わたしに聞け、正しさを求める人、主を尋ね求める人よ。  
あなたたちが切り出されてきた元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ。  
あなたたちの父アブラハム、あなたたちを産んだ母サラに目を注げ。  
わたしはひとりであった彼を呼び、彼を祝福して子孫を増やした。  
主はシオンを慰め そのすべての廃墟を慰め 荒れ野をエデンの園とし  
荒れ地を主の園とされる。そこには喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く。」  
(『イザヤ書』51:1-3)

**主の祈り**

**交読詩編** 詩編116編10～14節

わたしは信じる  
「激しい苦しみに襲われている」と言うときも  
不安がつのり、人は必ず欺く、と思うときも。  
主はわたしに報いてくださった。  
わたしはどのように答えようか。  
救いの杯を上げて主の御名を呼び  
満願の献げ物を主にささげよう  
主の民すべての見守る前で。

**使徒信条**

**讚美歌** 二編144番 すみわたる大空に 星かげはひかり

**聖書** 創世記3章8～13節

8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、  
主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9 主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10 彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。

わたしは裸ですから。」

11 神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12 アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、  
食べました。」

13 主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

**牧会祈祷** 天の父なる神さま、新しい朝をありがとうございます。

今朝もあなたから新しい命を与えられたことを、喜び、感謝いたします。

5月最後の主の日を迎えました。天地万物を造られた主の御業を讃えます。

昨日は、ウェスレー回心記念日の礼拝を守り、私たちの教会の礎を覚える時を与えられました。深く、感謝をいたします。神さまの御手によって洗礼を授けていただいてからも、この世の荒波に信仰が揺さぶられる時がある、そのような日常を私たちは生きています。しかしながら、どんな時もイエスさまが執り成しの祈りをもって、この日々を支えていてくださることを知り、感謝をささげます。私たちもまた、神さまに祈る心を忘れることがありませんように。世界中の教会が、安息の日の礼拝をささげている今日、どうか御手によって、すべてのものを聖なるものとしてください。

過ぎる七日の歩みを思い起こしますと、神さまの御心を尋ね求めず、自分の勝手な判断で正当だと思ふことをおこなってきたことを恥じ、省みます。どうか今日、聖書から御赦しの言葉を聞く者として、御前に新たに立たせてください。主に向き直る新しい霊を、わたしの内に授けてください。

この週も新島教会の兄弟姉妹と共に祈り合い、支え合いながら信仰の旅路を歩むことができますように。病の床にあり、或いはさまざまな苦しみの中にあつて、礼拝をささげることが出来ない友の上にも、主の豊かな祝福がありますように。緑の美しい季節にあつて、私たちが等しくあなたを讃美する恵みを、あなたの憐れみに縋る自由を、与えられていることに感謝して、この祈りをイエスさまの御名前によっておささげいたします。アーメン。

**説教**「あなたはどこにいるのか」 創世記3章8～13節 岩田 真紗美 副牧師

主なる神さまは、園のなかで「アーダム、アーダム…」と、オロオロしながら豊かな草木を掻き分けつつ「アダム」のことを捜されました。『創世記』3章の8節は、神さまがその御足の裏を大地にこすり付けながらも、右往左往しながら愛する「アダム」を捜し回っておられる様子を表しています。「風の吹くころ」というのですから、夕方の日も沈みかける頃でしょうか。神さまが近づいて来られるその気配を、「アダム」自身が感じ取って木の間に隠れる前から神は彼を捜しておられたかも知れません。8節の「園の中を歩く音」と訳されているヘブライ語の元の言葉は、すっきりとした気持ちで、散歩がてら颯爽と歩く音というような意味ではないのです。どちらかと言えば「歩き回る、巡る、さまよい歩く、彷徨する」と訳すほうがふさわしいような、人間が気持ちを揺らしながら、右に、左にオロオロと、そぞろに歩きで歩いている様子を聖書は伝えています。さらに、そのような時の足音、或いはそのような時の「声」という意味が原文の持つニュアンスであると言えます。ですから神さまは、決して短い時間だけアダムを捜しておられたわけではないのです。例えば、わたくしは動物園が好きで、娘も動物園が好きなので、お互いにもあまりにも動物の愛らしい姿に見入ってしまい、はぐれてしまうということがよくあります。そのような時、わたくしは我が子が傍らにいないことに突然気づいて、それから捜し始めるのですが、大抵幾つか先のブースで巡り合うことが出来て、ある程度のあたりをつけて捜すということをします。しかし、創世記の語る神さまは、わたくしどものような場合とは全く違うのです。まるで思いついたように、夕方になって初めて「アダム」を捜し始めたわけでもなければ、一つだけ駄目だと言っておいた命の木に触れたのではないかとアダムを疑って、ある程度あたりをつけて園の中を歩いておられたというわけでもないのです。どこに行ってしまったのだろうか…、もう日が暮れてくるというのに…、と、獣たちが動き回るような時刻になってもまだ

捜し回らなくてはならないほど、神さま御自身がここで気を揉まれておられたことが分かります。しかも、この8節の「足音」の「音」という言葉は、先ほど触れましたように「声」と訳すことも出来る言葉ですから、「アーダム、アーダム」と神さまはアダムの名前を呼びながら、その返事が草むらの中から微かにでも聴こえてくることを待ちつつ、耳を澄ませながら捜されたかも知りません。

創世記の2章の16節付近に話は戻りますが、「園のどの木からでも取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」(2:16b-17、『聖書協会共同訳 聖書』より)と、主なる神は確かに言われました。どの木からでも取って食べなさい、と神さまはアダムに自由に食べ物を取って、代価を払うこともなく、その豊かな恵みを共にいる「女」と一緒に喜ぶことを得させてくださったのです。しかし結果としてこれだけは「取って食べてはいけない」と命じられた「命の木」(3:22)の実を、彼はいとも簡単に食べてしまいました。これだけは駄目だと言われたら、他にどれだけ沢山の恵まれた美味しいものが周りにあっても、その禁止されたひとつのものが、わたしたちは気になって仕方なくなるのでしょうか。しかしこの時点では、アダムにも、彼に「命の木」の実を与えてしまった「女」にも、そのような思考力はありませんでした。聖書が「野の生き物のうちで、最も賢い」(3:1)ものとして描いている「蛇」がそそのかす、そのしたたかな問いかけを受けるまでは、男も女も神の豊かな恵みを素直に享受していたのです。

「蛇」に唆されて初めて「女」は、神さまの言葉に懐疑心をよぎらせるようになってしまいました。きょう共にお聞きしている3章8節の少し前ですが、「蛇」はこのような問いを「女」に投げかけます。「神は本当に、園のどの木からも食べてはいけない、と言ったのか。」(3:1b)と旧約聖書の原文のヘブライ語は、「本当に、あの神がそんなことを言われたのか？」という強い疑いのニュアンス、強意を伝えています。この問いに誠実に答えようとすればするほど、「女」は自分で言っていることに自分自身が狂わされていってしまうのです。初めは神の恵みを十分に喜んでいたにも関わらず、神さまの愛のゆえの忠告に疑いを抱いていくようになっていきます。神さまが本当におっしゃった言葉は、「園のどの木からでも取って食べなさい。」という恵みに満ちた言葉でした。「わたしたちは園の木の実を食べることはできます。」と2節で「女」は答えます。どれでもいいよ、でもあれだけは駄目だよ、と言われた神さまの言葉のニュアンスは、この時すでに含まれなくなってしまいました。どちらかという「女」は「わたしたちには何を食べることも可能だ、できます」という主旨で「蛇」に答えています。何でも可能なのになぜ、あれだけは駄目なのかと、そう思い始めたら、人の命を守るために神さまが愛のゆえに定められた掟が、何だか神御自身が神であることに固執するために言われたことのように、「女」には思えてきてしまいました。その心を「蛇」の言葉がこの後、膨らませていきます。「いや、決して死ぬことはないさ。それを食べれば目が開かれて、神のように善悪を知る者となることを、神は知っているんだよ。」(3:5、私訳。)と、「蛇」はまるで赤子の手をひねるように彼女を騙しました。

この箇所から、わたしたちは本当に、悪に対して弱い者であることが見えてまいります。神さまに与えられたたった一つの掟も守り通すことが出来ない愚かさが、見えてまいります。「女」は、神さまが共にいるように与えてくださった園の中の唯一の友である「アダム」のことまでも「命の木の実」を与えることで罪に招いてしまいました。わたくしたちが教会で毎月、聖餐式の度に唱えている「悔い改めの祈り」を思い起こします。「わたしたちは罪の虜であり、自らその縄目を解くことができない」のです。そうであるからこそ、悪の声を聴いたならば、それには断固として応じることなく、その瞬間に神さまから与えられた口で、神さまから与えられた祈りを

唱えて、「神さま助けてください」と祈りたいと思います。

「神さま、何だかよく分からないのですが助けてください。あなたはどこにおられるのですか」と、「女」はまず、神のかたち似せて造られた「男」(1:27c)と共に、神のかたちの「口」で神を呼べば良かったのかも知れません。特にこの創世記が記された時代には、バビロン捕囚がありましたから、この時代を生きた預言者イザヤの事を思い浮かべるのですが、彼はこのような罪の虜になって離れられない神の民に対して、あの「モーセ」に働きかけてくださった神さまを思い出せと告げている事に、信仰者としての姿を示されます。『イザヤ書』63章11節以降ですが、「どこにおられるのか、その群れを飼う者を海から導き出された方は。」(63:11)、「どこにおられるのか、聖なる霊を彼のうちにおかれた方は。」(同)、「どこにあるのですか、あなたの熱情と力強い御業は。あなたのたぎる思いと憐れみは」(63:15)と、預言者は立て続けに神に問いかけ、神を呼びます。小鳥の雛が、巣の中で真っ赤な口を開けて親鳥を呼ぶように、造り主であり贖い主である神さまを呼ぶのです。

しかし今日ご一緒に創世記からお聞きしているように神さまは、そのようにする事も出来ない迷い出た羊のような者にも、「あなたはどこにいるのか」(3:9、私訳。)と、罪の虜になっているわたしたちの状態を一早く捜し出そうと声を発せられます。神にのみ、この土のかたまりから造られた「アダム」は罪の赦しを乞わなくてはならないからです。造り主であると同時に、わたしたちの唯一の贖い主でもあられる神さまは、「アダム」に悔い改めの「口」を開かせるために、今日最初にヘブライ語からのニュアンスでお伝えしたように彼を、オロオロしながら捜し回られました。「どこにいるのか」(3:9)と。一緒にいて共に罪の虜になった「女」には、「何ということをしたのか。」(3:13)と言われました。この神さまの声は今ここで御一緒に安息の日を覚えて礼拝をおささげしているわたしたちへの声でもあります。悔い改めの『詩編』の数々を歌ったあのダビデ王は、主の僕として神のこのような「声」に祈りをもって繰り返し応えています。最もわたしたちが良く知るものは『詩編』51編かも知れません。「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し、御目に悪事と見られることをしました。」(51:6a)とダビデは十戒の一つを破った罪を悔い改め、「わたしの内に(中略)新しく確かな霊を授けてください。」(51:12)と神に直訴して祈ります。罪を犯した経緯を述べて、まず言い訳をした「アダム」とは、神への応答の言葉が大きく違います。また、ダビデの犯した罪で直接害を受けた人間に対する「謝罪」とも違う、この唯一の神への祈りが、聖書の伝える「悔い改め」の姿であることを最後に覚えたいと思います。自分自身では罪の虜になっていくことしか出来ないわたしたちが呻きながら被造物として生きる、あのパウロがそのように表現したこの世に、神は御子イエス・キリストを降されました。その主が十字架におかかりになってまでして成し遂げてくださったわたしたちの罪からの解放の力は、やがて主が再び来られる終わりの日に、わたしたちをもう一度あの「命の木」(『ヨハネの黙示録』22:14)に至らせてくださいます。『創世記』から『ヨハネの黙示録』へと、今日も共に祈り合いながら、主の御声を聴きつつ歩み出したいと願います。お祈りをいたします。

#### 祈祷

讚美歌 352番 あめなるよろこび こよなき愛を

#### 献金

頌栄 544番

#### 祝祷

平和のうちにこの世へと出て行きなさい。主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、  
聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。 アーメン